

村史こぼれ話 2 1

江戸時代の弥彦の道はどのようなであったか、史料をもとにたどってみましょう

正保 2 年（1645）と慶安元年（1648）の絵図によると、弥彦村域における主要交通路は、北国街道とその枝道であった。北国街道は寺泊町から野積村を通り、猿ヶ馬場峠を越えて麓村に出て、そこから観音寺村を経て弥彦村に至り、石瀬・岩室・稲島・布目・松野尾・赤塚（宿駅）・四ツ郷屋・五十嵐などを経て新潟町に至る道である。この北国街道を弥彦村域に限り、慶安 4 年の文書によって、より詳しく見てみよう。

野積村境の麓村分みのわ（黒滝城の砦の一部）から与板領麓村まで 16 町 40 間（1 町は約 109m、1 間は約 1.8m）あり、道幅は 2 間半から 3 間ほどで、良好な石、砂道である。この道には坂が 1 つあり、これが麓村分の猿ヶ馬場坂で、「つづら折」で 10 町あり、これも石道・砂道でよいとある。麓村から観音寺村まで約 3 町 40 間、道幅 2 間の石道で、この間に川幅 2 間、水深 5 寸（1 寸は約 3cm）の「しょく川」という川があり、出水時でも歩行渡りができる。観音寺村から弥彦村まで 13 町 46 間あり、道幅は 2 間から 2 間半ほどのよい石道で、この間に矢立坂という長さ 4 町 20 間の坂と、4 つの川（矢立川・から滝川・^{ほらい}祓川・十三川）がある。弥彦村は家数 48 軒の宿駅で、弥彦村を出ると泉村まで 13 町あり、この間に赤坂という約 1 町の石道がある。泉村から石瀬村まで 14 町 3 間、この間に茶屋坂という坂と茶屋川があり、茶屋坂は長さ 4 町、片坂（片側にだけ家があるという意味か）で道がよく、茶屋川は川幅 2 間、水深 3 寸で出水時でも渡れる川とある。

北国街道の枝道としては、寺泊から渡部へ出て、国上村を通過して山沿いに長崎新田・辰ノ口を通過して麓村に至り、北国街道と合流する道がある。これは、北国街道の猿ヶ馬場峠が雪中で風が強く、人馬の往来ができなくなったとき、弥彦駅に至る道として利用されたものである。もうひとつの枝道は、弥彦村から井田村へ出て、井田丘陵を越えて矢作村に至り、そこから信濃川（現在の西川のこと）を舟で渡って吉田村（宿駅）に行く道である。弥彦村から井田村までの間には、矢川が流れ、矢川橋があり、井田村から矢作村の間には「べっこ坂」という坂があった。矢作村から吉田村までの間には西川があり、川幅 1 町 20 間（約 145m）、水深 3 尺から 4 尺で、通常は舟で渡るが、干上がれば歩行渡りもできた。この弥彦村から吉田村にいたる枝道は、概して道幅は 1 間半から 2 間で、しかも一帯が低湿地であったため、ぬかり道・すべり道が多かった。西川の川幅は場所によって異なるが、今日の川幅より広がったことがわかる。（松永克男）